

「標準外科学」

〔編集責任者〕

武 藤 輝 一 新潟大学教授

相 馬 智 杏林大学教授

東京大学教授

和 田 達 雄

今日のように医学が専門分化してくると、学生や研修医に外科学を教育する場合、その範囲をどの程度にとどめたらよいか悩むことが多い。すべての外科の分野に通暁する教育者というものは、もはや存在しえないから、この範囲の決め方は各分野を担当する教官の合議にゆだねられる。専門家は日常、自分の分野の症例しか扱っていないから、その疾患がきわめて重要でしかも頻度の高いものと錯覚しやすい。したがって、この合議というものが曲者で、各分野の教育に平等な時間と空間を与えるということで意見の一致をみることが多い。

外科学の教科書についてもまったく同様で、分担執筆にならざるを得ないが、各執筆者の受け持つ頁数はややもすると悪平等ということになりかねない。筆者は学生や研修医に用いる外科学の教科書を評価する場

合に、まず各分野に対する紙面の割当てに注目することになっている。将来外科医になるとはかぎらない若い人たちに対する書物は、当然総論的でしかも実地臨床に則した項目を重視すべきであろう。

この「標準外科学」はまさに“標準”という名の示すとおり、この期待に応えるものであろう。昭和29年に医学部を卒業して約20年間外科学の各分野で教育と診療にたずさわった15人の執筆者が、編集責任者である武藤輝一、相馬智両教授のもとに、「実地診療に必要な外科的原則を総論にもりこ」み、各論においては「思い切った取捨選択をし」て、この点を解決している。

当然、個々の疾患については記載がきわめて簡略化されているわけであるが、臨床的に重要な項目については、「形態学偏重の外科学から、できるだけ生理や生化学的感觉をも

りこみ、機能的外科学をも重視」しているし、「疾患を疫学的な面からもとらえる」努力がなされている。これだけの内容を500頁の「handyな一冊本」にまとめるのには、大変な苦労があったものと推察される。

「医師国家試験は、臨床上必要な医学及び公衆衛生に関して、医師として、具有すべき知識及び技能について、これを行なう。」と医師法第三章第九条に示されている。この書物に盛られた範囲の外科的知識が、これに該当するかどうかの判定は、きわめて難しい問題であろう。しかしながら、序文にも述べられているように、編集の基本方針がこの方向に向けられ、努力が払われているものといえよう。

B 5 頁544 図417 ¥6,500 ㄱ300
医学書院刊